【目次】

第六話　チン出し子役からチン出しアイドルへ　……2
第七話　デブショタの太志くんがチン出しアイドルを志した理由　……23
第八話　3人目の『チン出しアイドル』決定！　……46
最終話　ボクらがチン出しアイドルだ！　……70
エピローグ　～ボクらがはだかんボーイズだ！～　……83
【外伝】チン出しドッキリ　マルキン報告！①　……87
【外伝】チン出しドッキリ　マルキン報告！②　……94
あとがき　……106

第六話　チン出し子役からチン出しアイドルへ

１．『チン出し子役』から『チン出しアイドル』への道

（略）

いよいよ、翔汰と拓也が『はだかんボーイズ』としてアイドルデビューする日がやってきた。

そのステージは、歩行者天国の真ん中に設置されていた。

ＨＩＲＵＹＡＮではよくある繁華街の青空の下、番組が急遽組み立てるステージだ。

当然、入場料などは取れない。歩行者天国を歩く人々全員がお客さん。

ＨＩＲＵＹＡＮの視聴者もやってくるだろうが、お買い物中の主婦やその子ども達も、遊びに来た中高生も、昼休みの会社員も、みんなお客さんだ。

そんな場所で、翔汰と拓也は歌うのだ。

２人はロケバスの中にいた。

このロケバスの窓は中からは外が見えるが、外からはみえない特殊なものだ。

車の中には他にも出番を終えた『ＫＩＲＵＮ』もいた。

ＫＩＲＵＮは女子高生ソロアイドルで、ＨＩＲＵＹＡＮで半年前にデビューしたばかり。

いわば、『はだかんボーイズ』の直近の先輩といえる。

窓の外を見ると、すでにライブは佳境に入っており、『はだかんボーイズ』の出番も近い。

翔汰は高鳴る心臓が抑えられなかった。

こんなにドキドキするのは初めてだ。

１年生の時初めてドラマに出演したときも、『チン出し子役』

として再デビューしたときも、こんなにドキドキしなかった。
翔汰の隣に座った拓也が言った。
「オイラの足を引っ張るなよ」
「こんな時まで毒舌？」
「そんなに緊張するなって言ってんだ。１ヶ月頑張った自分を信じろ」
（あれ？　毒舌からツンデレに進化でもしたの？）
ちょっとビックリして、拓也を改めてみたが……彼は両手を小刻みに震わせていた。
（なんだ、拓也も緊張しているんじゃん）
考えてみれば当然だ。
拓也の方が子役としての場数も少ない。
歌の練習でも、翔汰と拓也なら翔汰の方が上手かった。
彼が緊張しないわけがない。
翔汰は拓也の手にそっと自分の手を置いた。
「大丈夫、僕らならできるよ」
拓也は顔を真っ赤にした。
「あ、当り前だろ！　オイラは問題なんてないっ！　心配なのは翔汰だけだっ！　安心して失敗しろよ、オイラがいくらでもフォローして、リーダーの座もうばってやるからな」
（うわぁ、本当にツンデレに進化した！？）
ちなみに、『はだかんボーイズ』のリーダーは、一応翔汰ということになっている。別にリーダーだから何かあるってわけでもないが。
その時、ロケバスの入り口からスタッフが顔を出した。
「『はだかんボーイズ』の２人、そろそろ出番だから、衣装に着替えて」
（いよいよか……）
もう、いくしかない。

翔汰と拓也は着替えを始めた。
シャツを脱ぎ、半ズボンを下ろそうとした翔汰達に、ＫＩＲＵＮが慌てた。
「ちょっと、ここで着替えるつもり！？」
「そうですけど……」
「女子もいるんだから気をつかいなさいよ」
ＫＩＲＵＮの言葉は正論と言えば正論。
だが……
「そうはいうけど」
「どうせオイラたちは……なあ？」
翔汰と拓也は苦笑し合う。
ＫＩＲＵＮは訝しがった。
「何よ？」
「どうせ僕達の衣装は靴とハチマキだけですから」
「はぁ？」
説明している時間は無い。
翔汰と拓也はズボンとパンツを脱ぎ捨てた。
「きゃっ、ちょっと、小学生だからって許されないわよ！　セクハラよっ」
（うわぁ、僕らのオチンチンをみて、まともな反応されるの久しぶりだなぁ）
なんだか、懐かしい反応にすら感じてしまう。
ともあれ、２人は衣装の運動靴と靴下を履き、ハチマキを縛った。
それぞれ、翔汰の靴とハチマキには赤のラインが、拓也の靴とハチマキには青のラインが入っている。
『はだかんボーイズ』の衣装はこれで全てだ。
おへそも背中もお尻もオチンチンも、みんな丸出し。
朝倉ケンタが好んでいたような全裸が正式ユニフォームなの

だ。
「いくよ、拓也くん」
「ふんっ、当然だぜ」
翔汰と拓也はバスの出口へと歩く。
ＫＩＲＵＮが１人で大慌てになった。
「ちょっ、あんた達、なにしているのよ！？　そんな、色々、丸出しじゃないっ！」
「はい。だから僕らは『はだかんボーイズ』なんです」
「まさか……『はだかんボーイズ』って……裸ん坊の男の子たちってこと！？」
「そうですよ」
なんてことない顔で言った翔汰に、ＫＩＲＵＮは目を見開いた。
「正気なの！？　そんなかっこうでステージに……っていうか、歩行者天国に行くつもり！？」
「はい」
「ありえない！　その歳で露出狂なの！？　いくら小学生でも羞恥心ってないわけ！？」
「えーっと……ひょうっとしてＫＩＲＵＮさんは朝倉家シリーズって知りません？」
「なによそれ、なんかの漫画？」
どうやら彼女は本当に知らないらしい。
「ドラマですよ。この間映画も公開された」
「映画……って、ああっ！　ひょっとして、あの裸ん坊のポスター！？　あれ、アンタ達！？」
「はい」
「それで、今度は全裸アイドルになるの！？」
「そうです」
「信じられない……確かに、最近は男の子のオチンチンブーム

なんていう変なことが起きているみたいだけど」
　ＫＩＲＵＮは頭を抱えてしまった。
「あ、それもオイラたちの映画がきっかけ」
「違うだろ僕のドラマ！　映画より前から『チン出し子役』ブームはきていたんだからっ！」
「えー、そうかなあ。オイラのチン出しの方が『かわいい』って女子中高生に人気だぞ」
「どこの情報だよ、それ！？」
「女性向けファッション誌に書いてあったってマネージャーが言ってた」
「うぁ、ソースとして信用度ねー」
　拓也はムッとした顔になった。
「じゃあ、ＫＩＲＵＮさんに聞いてみようぜ。オイラと翔汰のちんちんどっちがかわいい？」
　そういって、拓也はＫＩＲＵＮに自分のオチンチンを突き出した。
　そんなことをされると、翔汰も『チン出し子役』……いや、『チン出しアイドル』として対抗心が燃え上がってきた。
「僕のちんちんの方がかわいいですよね？」
　翔汰もＫＩＲＵＮに自分のオチンチンを見せつけた。
　ＫＩＲＵＮは顔を引きつらせて叫んだ。
「しらないわよ、この変態露出狂小学生コンビ！　とっとと出てけ！」
「えーもうちょっとオイラのチンコみてよぉ」
　などと言っていると、スタッフがもう一度言った。
「いつまでも馬鹿なことやっていないで！　もう出番だよ」
　さすがにそう言われては２人ともバスから降りるしかない。
「ううっ、寒いな」
「オイラ、風邪ひきそう」

冬の風は裸ん坊には堪えた。
あの裸祭り会場ほどではないが、寒い。
気がつくと、翔汰と拓也は２人並んで腕を胸の前で組んでいた。
バスの周囲には人が入れないようにロープがはられていた。
だが、休日の歩行者天国は老若男女問わず大量の人々であふれかえっている。
もちろん、彼らはスタッフでも役者でもエキストラでもない。
それどころか今日、チン出しアイドルがやってくるなんて知らない人たちだ。
半年前の翔汰だったら、こんな場所に設置されたステージに全裸で登場するなんて考えられなかっただろう。
だが、『朝倉家シリーズ』や『野球拳クイズ』を乗り切った翔汰にとっては、もはやチン出しなんて慣れたものだ。
それよりも、この後ちゃんとデビュー曲を歌えるかの方がずっと心配だった。
「よし、行くかっ！」
気合いを入れた翔汰に拓也もこたえた。
「おう！　オイラ達のアイドルデビューだ」

2：『はだかんボーイズ』（仮）結成♪大オーディション開催！

特設ステージは大盛り上がりだった。

なにしろ、名だたるアイドル達が次々に現れ、歌って踊ってトークしているのだ。

これで盛り上がらないわけがない。

歩行者天国を歩く人々も足をとめ、楽しんでいる。

（ゴクリ）

翔汰はステージの袖で唾を飲込んだ。

『はだかんボーイズ』の出番まであと5分もない。

この大盛り上がりの中に出ていって、本当に大丈夫なのか。

ちゃんと歌えるのか。

不安はつきない。というか、不安しかない。

拓也の言うとおり1ヶ月猛特訓した自分を信じるしかない。

（子役もアイドルも同じだ。ステージに上がるまでは色んな人が力を貸してくれるけど、本番は自分の力で頑張るしかない）

そんな翔汰に、隣の拓也がボソリという。

「きょうは勃起するなよ」

「当り前だろ！」

「心配なんだよなぁ」

「意識しない方が勃起しないんだからね」

その言葉に拓也は『ヤレヤレ』という顔を作った。

「意識するとこの状況でも勃起すんのかよ……」

「いや、そうは言ってないけど」

「ま、いいさ。少しは緊張も解けただろ？」

「へ……？」

「チンコのまえに全身がガッチガチじゃ上手くいくもんもいかねーって言ってんの」

そういって、拓也はそっぽを向いた。

（中略）

『はだかんボーイズ』大オーディションの会場は、とある商店街に併設された児童公園だった。

オーディションに申し込んだ太志は、即日書類審査に合格。どうやら本当に参加志望者が少なかったらしい。

今日、公園に集まった参加者も、ざっとみたところ５０人もいない。

『ＨＩＲＵＹＡＮ』ではこれまでも似たようなアイドルのオーディションを開催しているが、普通は応募人数は１万人を超え、書類選を経ても２００人とかが残るはずだ。

だが、今回は応募者数が本当に少なかったのだろう。もしかすると応募者全員でこの５０人弱だったのかもしれない。

何しろ、アイドルとは正反対のデブ少年の太志がここにいるくらいなのだから。

（そりゃそうだよなぁ）

テレビで全裸を晒したいなんて小学生がそうそういるわけがない。

最初から子役やアイドルを目指している子でも、全裸アイドルなんてレッテルを貼られるのは避けたいだろう。

仮に本人がやりたいと言っても普通の親は止めると思う。

（でも、ぼくはやっぱり不合格だろうなぁ）

いくら参加人数が少ないと言っても、４０人以上はいるのだ。倍率は高い。

なにより、太志ほどぶくぶく太っている子はさすがにいない。

太志よりカッコイイ子やカワイイ子もいる。というか体重９７Ｋｇのデブ少年にくらべればみんなカッコイイ。

（ま、ここまで来たら気楽にいこう）

太志はそう開き直っていた。
やがて、カメラなども設置されオーディションと撮影の準備が整った。
そして、オーディション参加者の前に太志も見たことがある芸人が現れた。
「皆さん、よく集まってくれました～。これから『はだかんボーイズ』大オーディションを開催しま～す」
（あの人は……）
確かフジーハマとかいうお笑い芸人だ。
『ガンバレ！フジハマ大教室』という子供向けバラエティ番組で教師役をやっている人だったと思う。
最近は子供向け番組以外でも活躍の場を広げていたはずだ。
そういえば、赤貝翔汰と青木拓也が出演した野球拳クイズでも司会をしていたような。
いずれにせよ、カメラの撮影も始まり、いよいよオーディションが開始されたのだった。
フジーハマがオーディション参加者の少年たちを一通り眺めながら煽るようにしゃべった。
「おおっ。こんなにたくさんの少年たちが集まるとは。みんなかわいいなぁ。きっとおちんちんもかわいいんでしょうね～。なにしろ「はだかんボーイズ」になりたい子たちですから！」
その言葉に、少年たちの顔が引きつった。
「それでは、さっそく１つ目のテストを開始しま～す。まずはあちらをご覧ください」
フジーハマが指し示した方向には、四台のカメラがあった。カメラは直径２メートルほどの円を描くように設置されており、円の中心をどの角度からでも撮影できるようになっていた。
「まずはみなさん、１人ずつカメラの真ん中に立っていただきます。そこで、自己紹介して着ているものをすべて脱いでくだ

さ～い。もちろん、その映像は後日放送の『ＨＩＲＵＹＡＮ』でしっかり流されちゃいますよ～。さあ、我こそはという方はカメラの方へ！」

（これがひとつ目のテストか）

さすがは『はだかんボーイズ』のオーディションだ。カメラの前で本当に全裸になる勇気があるのかを試しているのだろう。

１人の少年が早速とばかりに四台のカメラの中心へと走った。

まさに美少年といった顔立ち。金髪だしもしかするとハーフなのかもしれない。

「オレはエントリー番号２３番。菊田レオ、小学５年生です！歌とダンスには自信があります！」

レオはそう叫ぶと、躊躇なく服もズボンもパンツも脱ぎ捨てて全裸になってみせた。

おちんちんもお尻もなにもかもカメラに収録されているのに、堂々としたものだ。

レオのおちんちんはちょっとだけ金色の毛が生えていた。

フジーハマが会場を盛り上げる。

「おおっ、いきなり元気ですね～。お次は誰かなぁ？」

次にカメラの前に立ったのは、かわいいというよりはカッコイイ系の少年。

ガタイもいいし、まさにスポーツ少年といったかんじ。

「俺はエントリーナンバー３２番。中学２年生の佐倉井力（さくらいちから）だ。水泳部だから裸なんてなんてことないぜ。よろしくなっ！」

その言葉通り、力もあっというまに全裸になった。

おちんちんはでっかくて完全に発毛している。ずるむけで巨大な大人ちんこだった。

フジーハマがさらに叫んだ。

「なかなかにかっこいい宣言だ！　これは有力かぁ？　さあ、

次におちんちんをカメラにさらすのは誰だぁぁっ！？」
だが。
元気のいい候補者はそこまでだった。
ほかの候補者たちは顔を見合わせてなかなか動こうとしない。
中には「あんなことできるかよ」と露骨に言っている子もいる。
太志も緊張して名乗り出れなかった。
と。
それでも１人の少年がカメラの前に進み出た。
いや、少年というよりも男の子という方がイメージに近い、幼い子だ。
かわいい系の美少年である。
「ぼくは久利（くり）りにあ、１２番です。小学２年生。子役です。がんばります！　赤貝翔汰さんに憧れています！　あ、こんな名前ですけど本名です。パパがリニアモーターカー好きなんで」
りにあはそういうと、ちょっと顔を赤らめながらも服とズボンを脱いで全裸になった。
りにあのおちんちんは、太志よりももっと小さい子供ちんちんだった。
「おおっと、３人目は子役少年！　正直なのはいいことだ！
さてお次は？？」
その次にカメラの前に立った少年は……
「僕、や、山田孝弘（やまだたかひろ）です。小学５年生です。番号は１１番ですけど……」
孝弘はやたらとおどおどした様子だった。トレーナーこそ脱いだものの、その後は周りをキョロキョロと見回した。
（後略）

【外伝】チン出しドッキリ　マルキン報告！①

溶けちゃう水着変

『朝倉さんちの大騒動』で赤貝翔汰が『チン出し子役』として再ブレークして1年あまり。『朝倉ケンタの大騒動』が上映されて、『チン出し子役』ブームが徐々に広がって半年あまり。

３人組『チン出しアイドル』の『はだかんボーイズ』が本格デビューして３ヶ月。

芸能界に男の子のチン出しブームが巻き起こっていた。

『チン出ししない男の子はいらない』

……もはや、テレビ局員がそう言い切るほどに、男児子役は『チン出し』が当然となったのだ。

そんな世の中を苦々しく思っている者もいた。

言うまでも無い。『チン出し』なんて考えてもいなかった、子役男児達である。

小学６年生の谷武史（たにたけし）もそんな1人だ。

（テレビでオチンチン丸出しなんて冗談じゃない！）

武史は子ども向けバラエティー番組『ガンバレ！フジハマ大教室』で、レギュラーをもらっている。

この番組は、お笑いタレントフジーハマが教師役となって、児童役の子ども達と色々なことにチャレンジするというのがテーマだ。

そんなフジハマ大教室にも『チン出しブーム』が襲いかかってきた。

番組内で、児童の男児達は色々な理屈をつけて『チン出し』させられるようになったのだ。

もちろん、女児の出演者もいる前でだ。全国放送でだ！

「俺は絶対にチン出しなんてしないからなっ！」

番組の裏で、武史はそうなんども親やマネージャー、プロデ

ューサーなどに断言していた。子役を脱がすことにまったく抵抗がなさそうなフジーハマにもだ。
だが、武史のその態度は、はっきりいって番組側からすれば『こまった子』でしかなかった。
番組スタッフたちは企画会議でなんども話していた。
「もう武史くんは転校でいいんじゃない？」
この番組における『転校』とは、実質的には『降板』である。
「だよなぁ。今どきチン出しどころかブリーフ姿すらイヤとかわがままずぎるでしょ」
「みんなチン出ししているのにねぇ」
「６年生になって人気も落ちているしね」
「昔は１、２を争う人気者だったとしても、ねぇ？」
「本当にチン出しはＮＧなの？」
「親や事務所はＯＫって言ってる。本人がかたくなにズボンやパンツを脱がないだけ」
「つまり、わがままじゃん」
武史はクビ。そう決まる寸前に別のアイデアを１人のＡＤが口にした。
「それ、親や事務所の許可は取れるの？」
「さあ、聞いてみないとなんとも。無理なら『転校』しかないと思いますけど」
「ダメ元で聞いてみるか」
結果、親や事務所はＯＫを出し、その企画は決行されることになったのだった。

（後略）